

第2回 19世紀イギリス文学合同研究会

日時 2025年12月6日(土) 13:00~18:00
場所 西南学院大学中央キャンパス1号館308教室
([キャンパスマップ／交通アクセス](#))
〒814-8511 福岡県福岡市早良区西新6-2-92
電話 092-823-3248(代表) 大学HP: <https://seinan-gu.ac.jp>

総合司会 日本ワイルド協会・日本女子大学名誉教授 川端 康雄

開会の辞 (13:00) 日本ハーディ協会・西南学院大学教授 金子 幸男

研究発表1 (13:05~13:40) 司会 愛知県立大学名誉教授 松本 三枝子
Elizabeth Gaskell の〈帝国〉がもたらすもの—“The Moorland Cottage”と
“Cousin Phillis”を中心にして— 北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

研究発表2 (13:40~14:15) 司会 福岡大学教授 福原 俊平
A Laodicean における神経症の時間とシミュラクルの悲劇—鉄道、電信、写真—
白鷗大学准教授 唐戸 信嘉

休憩 (14:15~14:20)

研究発表3 (14:20~14:55) 司会 明治大学教授 小宮 彩加
George Gissing, *Demos* (1886)にみられる環境意識と
再野生化(リワイルディング)の思想 京都府立大学教授 吉田 朱美

研究発表4 (14:55~15:30) 司会 群馬大学准教授 金田 仁秀
日本への憧憬—Mrs. Oscar Wilde の“Far Japan”— 同志社大学教授 桐山 恵子

休憩 (15:30~15:45)

シンポジウム (15:45~17:55): 19世紀イギリス文学における視覚表象

講師 日本女子大学講師 江澤 美月
講師 同志社女子大学准教授 木島 菜菜子
講師 上智大学教授 永富 友海
司会・講師 慶應義塾大学教授 原田 範行

閉会の辞 (17:55) 日本ワイルド協会会長・慶應義塾大学教授 原田 範行

諸連絡 (18:00)

懇親会 (18:20~20:10) 西南学院百年館(松緑館)多目的ホール(1階)

※19 世紀イギリス文学合同研究会に午後から参加の方の受付は、12 時 20 分から開始します。受付は混みあうことが予想されますので、早めにお済ませください。なお、午前の日本ワイルド協会大会から参加され、そのまま合同研究会にも参加される方は午前のうちに合同研究会の受付もお済ませください。

※大会参加のための事前登録は必須ではありませんが、準備の都合上、参加をご希望の方はできるだけ下記 URL（あるいは右の QR コード）から事前登録をお願いいたします。会員外の方も参加可能です（参加費無料）



<https://forms.gle/LDBVSRdpqgWaofwK>

※日本ワイルド協会大会懇親会も兼ねた 19 世紀イギリス文学合同研究会懇親会を開催します。会場は東キャンパス内の西南学院百年館（松緑館）1 階です。会費は 5,000 円です。参加をご希望の方は、上記の事前登録 URL から 11 月 14 日までにお申し込みの上、会費をお振込みください。

振込先：三井住友銀行国立支店（店番号 666 口座番号 7446591）日本ワイルド協会（阿佐美敦子）

※発表者控室は 1 号館 309 教室です。

※休憩室（1 号館 302 教室）を用意しております。教室内での食事は可能ですが、弁当箱やおにぎり、サンドイッチなどのラッピング、飲み終わったドリンクの入れ物など、食品が付いたごみの廃棄は、教室に備え付けのゴミ袋をご利用ください。

※大学生協（西南会館内）は 1 号館の近くです。当日は食堂（11:30～14:30）と購買店（10:00～14:00）をご利用いただけます。

※飲み物はキャンパス内の自動販売機、または大学生協・ライブラリーカフェ（図書館 1 階、10:30～17:00）をはじめ、近隣の商店をご利用ください。

※【近隣の商店】最寄りの市営地下鉄「西新」駅改札すぐ前にスーパー「フードウェイ西新店」、改札横に「ファミリーマート福岡西新駅店」がございいます。地下鉄「西新」駅から本学への道中で、「鰻の成瀬西新店」、「ローソン福岡西南学院大学前店」（2025 年 9 月現在）がございいます。また地下鉄駅南側には商店街があり、カフェ、レストラン、居酒屋等がございいます。

※新型コロナウイルス感染症等の感染症の拡大状況によっては、リモート開催に変更させていただく場合もございいます。

※第 2 回 19 世紀イギリス文学合同研究会の幹事学会は日本ワイルド協会です。

問い合わせ先：日本ワイルド協会内 19 世紀イギリス文学合同研究会事務局

（川端康雄：kawabata@fc.jwu.ac.jp）

主催 19 世紀イギリス文学合同研究会

日本ギャスケル協会、ディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本ハーディ協会、日本ワイルド協会



小倉	JR (快速) 約70分			
飯塚	JR 約45分	博多	福岡市営地下鉄 約13分	
佐賀	JR (快速) 約60分			
大牟田	西鉄 約70分	天神	福岡市営地下鉄 約7分	
唐津	JR・福岡市営地下鉄 約60分			
福岡空港	福岡市営地下鉄 約19分			



《第2回 19世紀イギリス文学合同研究会研究発表》

Elizabeth Gaskell の〈帝国〉がもたらすもの —“The Moorland Cottage”と“Cousin Phillis”を中心にして—

北九州市立大学 准教授 濱 奈々恵

トルコ赤の木綿、ショール、紅茶、アヘン。Elizabeth Gaskell (1810–1865) の作品では異国のモノが国内に入り、それと同じように、ヒトも国内から国外へと出ていく。異国のモノには〈帝国〉を意識させる要素が多数含まれ、ヒトは国境を越えた先の世界を理想化し、新天地での成功を期待する。ヒトとモノの移動が頻繁に、かつ広範囲に及んでいた1800年代の半ばにおいて、Gaskell が描く〈異国〉、さらに限定した〈帝国〉はどのようなものだったのだろうか。*Mary Barton* (1848) の結末では主人公一家がカナダで幸せに暮らし、“Cranford” (1853) ではインドから Peter Jenkyns が帰ってきたことで幸せが戻る。〈帝国〉と〈幸せ〉はある種、不可分な関係にあり、登場人物が〈幸せ〉を得るために〈帝国〉が都合よく利用されている。本発表では、Imperial Narrative との関係ではあまり論じられてこなかったであろう“The Moorland Cottage” (1850) と“Cousin Phillis” (1864) にある〈帝国〉の使われ方を検証し、Gaskell と文学上の親交があった George Eliot (1818–1880) の Imperial Narrative と比較しながら、その特異性に迫りたい。

A Laodicean における神経症的時間とシミュラークルの悲劇 —鉄道、電信、写真—

白鷗大学 准教授 唐戸 信嘉

Thomas Hardy の *A Laodicean* (1881) は19世紀後半の技術革新が人間の認識構造に与えた根本的变化を描いた先駆的作品である。作品に登場する鉄道、電信、写真という三つの近代技術が生み出す「神経症的時間感覚」と「シミュラークル」という二つの問題軸を統合的に分析し、両者の相互関連を検討することが本発表の主眼である。上記の近代技術は従来の自然な時間の流れを断片化し、瞬間性と即時性を重視する神経症的時間感覚を生み出す。同時にこれらの技術は現実の直接的表象ではない、ボードリヤールのシミュラークル（電信の匿名的メッセージ、写真の歪曲されたイメージ等々）を産出する。重要なのは、この二つの現象が相互に強化し合う構造になっている点である。即時性の要求は事実確認の時間的余裕を奪い、人々をシミュラークルへの依存に追いこむ。断片化された情報からの即断を強いられることで表面的な記号に頼らざるを得なくなる。その結果生まれる誤解や欺瞞が、人間関係を破綻させる悲劇を準備する。Paula Power と George Somerset の関係における電信でのコミュニケーションの混乱や、写真による誤った判断がその具体例である。本作品が備える、近代技術が時間感覚と現実認識を同時に破綻させる悲劇の構造と、デジタル技術が支配する現代社会の諸問題を一世紀以上も前に予見した先見性を、本発表では明らかにしていく。

George Gissing, *Demos* (1886) にみられる環境意識と再野生化^{リワイルディング}の思想

京都府立大学 教授 吉田 朱美

George Orwell の *Animal Farm* (1945) の着想源の一つとも言われる Gissing の長編小説 *Demos* は、*A Story of Socialism* というその副題が示すように、労働者たちによる一つの社会主義運動の試みの顛末を描いた物語である。主人公 Richard Mutimer は思いがけず相続することになった遺産を工業団地の建設と社会主義の理念追求のためつぎ込むと公言するものの、彼の中に芽生えてきた階級上昇への野心はその当初の理念との間に次第に齟齬をきたしていく。

本発表では特に、この作品にみられる作者 Gissing 自身の自然環境への関心に注目し、再読を試みる。Mutimer の社会主義プロジェクトの舞台となる Wanley の谷とその景観はこの小説の影の主人公ともいえるべき存在感を放つ。工業団地の建設とともに削られていった消滅した緑地と森林が、作品終結部においては貴族の末裔 Hubert Eldon によって元の形へと蘇らせられることになる。Mutimer と Eldon の間の価値観の対立の図式は Rebecca Hutcheon, *Writing Place: Mimesis, Subjectivity and Imagination in the Works of George Gissing* (Routledge, 2018) など従来の批評においては「イングランド北部の産業主義と南部の貴族的保守主義との間の衝突」のようにみなされてきたが、工業化による緑地の破壊と空気汚染が作物にもたらす悪影響にも Gissing が目を向け、描き込んでいることは注目に値する。この小説が発行される 2 年前の 1884 年に John Ruskin が行った講演“The Storm-Cloud of the Nineteenth Century”と同様の問題意識がそこには見られるようである。1885 年に出版され人気を博していた Richard Jefferies, *After London* とのテーマ上の類似も興味深く思われる。

日本への憧憬

—Mrs. Oscar Wilde の“Far Japan”—

同志社大学 教授 桐山 恵子

Oscar Wilde による童話集は有名だが、ワイルドの妻 Constance が Mrs. Oscar Wilde の名を冠した童話集：*There Was Once! Grandma's Stories* (1888) および *A Long Time Ago: Favourite Stories Re-told* (1892) を出版したことはあまり知られていない。ただしこれらの童話集に収められた物語は、「赤ずきん」や「シンデレラ」など古典的なおとぎ話を語り直したものであるため、コンスタンスの創作作品とは言いきれない。作者名として Mrs. Oscar Wilde が用いられた点からも、ワイルドの妻という肩書に拠って童話集を手掛けたようにもみえ、彼女自身の作家としてのオリジナリティーが前面に出ているとは言い難い。

そんな中 *Cosy Corner Stories* (1895) に収録された“Far Japan”は、作者名としては Mrs. Oscar Wilde が用いられてはいるものの、彼女のオリジナル作品である点は注目に値する。さらにタイトルから明らかなように、作品のテーマとして日本が大きく関わっている。誕生日に贈られた日本製のプレゼントに想像力を刺激された少女が、「遠き日本」を夢見るという物語内容は、コンスタンスとワイルドの日本表象を比較考察するうえでも興味深い。本発表がこれまでのワイルド批評で見逃されてきたコンスタンス作品を再評価するきっかけになれば幸いである。

≪第2回 19世紀イギリス文学合同研究会 シンポジウム≫

19世紀イギリス文学における視覚表象

講師	一橋大学	江澤 美月
講師	同志社女子大学	木島菜菜子
講師	上智大学	永富 友海
司会・講師	慶應義塾大学	原田 範行

日曜の朝、半ば閉じられた食料品店の鎧戸の隙間から中を覗き込むスクルージと精霊の前に繰り広げられる豊かで愉快的な光景、新設された鉄道に乗って変わりゆく村の景色を入念に描き込むことからシャーロット・ブロンテの伝記を始めるエリザベス・ギaskell、田園風景を活写したオランダ絵画を想起しつつ、象徴と具体を往還しながら綴られるファンシーとディックの心の揺れ、バーン＝ジョーンズやホルマン・ハントの絵に魅せられ、初の本格的な評論を構想する若きオスカー・ワイルド。19世紀イギリス文学には、視覚表象が横溢している。もちろんそのそばには、印象派やラファエル前派、ジャポニスムなどの絵画が、世紀末芸術運動が、あるいはクルックシャンクやテニエル、ピアズリー、リケッツ、クレインといった画家たちがいた。情景、景観、場面、表情、しぐさ、動き、自然、街、建築、美、舞台、空間、彫刻、色合い、陰影などなど、そもそも文学作品には、多様で多彩な視覚表現が満ちている。しかしとりわけ19世紀のイギリス文学には、社会の大きな変容とともに、ホラティウスに淵源する *ut pictura poesis* をめぐるさまざまな近現代的展開を観察できると言えよう。ときに言語表現とは対照的でさえある視覚表象を敢えて視点に据えることで、逆に、19世紀作家たちの文学的特質に新たな相貌を見出そうとすること—それが、本シンポジウムの目標である。(原田)

ギaskellとラファエル前派 —絵画表象とリアリズム—

一橋大学 講師 江澤 美月

ギaskellとラファエル前派の出会いについて、ジェニー・ユグローは、*Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (1993) の中で、1857年、マンチェスターで大規模な美術至宝展が開催された時、ジョン・エヴァレット・ミレイやウィリアム・ホルマン・ハントの作品を鑑賞した可能性を示唆して

いる。しかし、ギaskellの書簡を見ると、彼女はそれ以前にロイヤル・アカデミーの展示会で、あるいはラスキンの著作を通じて彼等の作品を知っていたことがわかる。ギaskellがラファエル前派の作品に興味を持ったのは、絵画への関心が強かった次女のマーガレット・エミリー・ギaskellや、画家であった友人のイライザ・フォックスの影響が大きいと思われるが、今回の調査でイライザは、ミレイと同じ頃、ロイヤル・アカデミー美術学校の予備校であるサス・アカデミーで研鑽を積み、また同じ頃、ロイヤル・アカデミーに出展し始めていることがわかった。

本発表ではギaskellの友人である画家、イライザが、労働者階級と資産家階級の対立を描いていると批判されたギaskellの小説『メアリ・バートン』(1848)を高く評価していること、さらにイライザが称賛したギaskellの『メアリ・バートン』が、テニソンの同題の詩を絵画化したことで知られるミレイの絵『マリアナ』に先立ち、同じテニソンの詩を用いてイメージを視覚化し、発展させていることを考察したい。

海景と帆船 —ディケンズの風景における愛と喪失—

同志社女子大学 准教授 木島 葉菜子

昨年出版された *The Edinburgh Companion to Charles Dickens and the Arts* 中の風景に関する章において Malcolm Andrews は、ディケンズの風景における「動き」の重要性を指摘している。本発表はこの指摘を出発点に、ディケンズの作品における海の風景の特徴と機能を再考するものである。

ディケンズの小説やエッセイには様々な海の風景が登場するが、本発表は特に、その中の帆船のイメージに注目したい。それは海の風景の一要素として登場するだけでなく、*David Copperfield* や *Great Expectations* においては、主人公の愛と喪失の経験と結びついて登場する。*David Copperfield* では、主人公デイヴィッドの初恋の相手エミリーに帆船のイメージが付随し、船が遠ざかっていく光景は、彼女に対するデイヴィッドの喪失感の比喩として機能する。そしてこのイメージは小説後半において彼女が移民船でオーストラリアへと渡る場面で頂点を迎える。同様に、*Great Expectations* で繰り返し言及される海に浮かぶ白い帆船は、主人公ピップにとって叶わない恋の相手エステラへの思いと結びついており、その光景は、輝かしくもあると同時に決して手に入らないものを表象する。

このように、ディケンズの一人称の小説二作における、航海する帆船のイメージは、光、動き、そして距離との関係性によって、さらに、ペゴティ氏の船の家や沼地の監獄船といった動かない船との対比によって、語り手でもある主人公の内面感情を投影する視覚的比喩として、極めてヴィジュアルに、象徴的に機能していると言えるのではないだろうか。

後期ヴィクトリア朝小説と視覚表象 —*Trilby*における挿絵と Bohemianism—

上智大学 教授 永富 友海

ヴィクトリア朝中期以降、挿絵画家、諷刺画家として、上・中流階級向けの高級文芸誌から通俗志向の雑誌に至る多様な媒体で、ときにサッカレー、ギヤスケル、ハーディといった当代一流の作家と、ときに凡百の流行作家との〈共同作業〉を手掛けてきたジョージ・デュ・モーリエ（George Du Maurier）は、英文学史の表舞台には現れないものの、1860年代のセンセーショナルリズム狂騒の只中を生き、知性派の代表格ジョージ・エリオットの知己を得、世紀末の耽美主義的気取りを冷笑し、英仏両国への愛着を親友のヘンリー・ジェイムズと共有する、まさに時代の文学ネットワークの各処に絡む重要な人物である。

なかでも特筆すべきは、敬愛するハーディとのタッグ（『エセルバータの手』と『熱のないひと』）が小説、挿絵ともに低評価に終わった約十年後、後者の掲載媒体『ハーパーズ・マガジン』に連載されたモーリエ第二作目の小説『トリルビー』（*Trilby*, 1894）が空前の売れ行きを記録したことだろう。小説から派生する舞台化や商品販売などの商業主義的展開や、1895年にイエール大学で開講された「現代文学」コースで、ハーディの『ジュード』やコンラッド、トウェインと並んで『トリルビー』が扱われたことが国内外での侃々諤々の論争に発展した事件は、まさにトリルビー現象の射程の広さを示すものである。本発表では、ジェンダー、人種、国籍、メスメリズム等々の問題群がくぐった煮＞的に詰め込まれた文字テキストを、そこに挿入された作家本人による挿絵という視覚テキストと並置し、テキストが喚起する欲望という観点から読み解いてみたい。

饒舌と喧騒に満ちたワイルド文学における瞬間性、視覚性

慶應義塾大学 教授 原田 範行

オスカー・ワイルドの作品は饒舌と喧騒に満ちている。それは、批評的対話を展開する『虚言の衰退』のシ ril やヴィヴィアンのようなワイルドの分身的人物の語りにも、ドリアン・グレイの心境告白にも、あるいは『まじめが肝心』のような喜劇において掛け合いを演じる登場人物たちの台詞にもうかがえる。『幸福な王子』にあっては、立像と化した王子も、そしてツバメまでもが語りだし、『カンタヴィルの幽霊』では、鎖帷子の幽霊があちこちを歩き回っては喧騒をまき散らす。しかしながら、ワイルド作品におけるこうした饒舌や喧騒は、それらとはきわめて対照的な寡黙と静寂をも常に内包している。詩「娼婦の家」では、街中の喧騒や大音量でシュトラウスを奏でる楽士が登場するが、それらは結局、「長い、黙した通り」の描写に飲み込まれてしまうし、饒舌な語りに満ちた『まじめが肝心』も、最後にはタブローという静止画像に収斂する。ヴィクトリア朝ロンドンを活写した詩「シンフォニー・イン・イエロー」も、末尾にあるのは翡翠色の黙したテムズ川である。

ワイルド作品における饒舌と喧騒の言語表現は、どうやらその背後で、寡黙と静寂を通じて瞬間をとらえた視覚表象に結びついているのではあるまいか。このような問題意識をもとに本発表では、饒舌と喧騒に満ちたかに見えるワイルド文学の背後に存在する瞬間性と視覚性について、彼の文章のロマンス的性格を含め、その特質を考える手がかりを考察したい。